

機関番号：12501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 年度～2010 年度

課題番号：21792251

研究課題名（和文） 第1子出生後の父親役割行動における妊娠期の予測と実際

研究課題名（英文） Prediction during pregnancy of paternal roles following birth of the first child and their actual condition

研究代表者

森田 亜希子（MORITA AKIKO）

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：10402629

研究成果の概要（和文）：

本研究は、第1子出生後の父親役割行動に対する妊娠期の予測と実際を明らかにすべく、15名の初めて親となる男性を対象に妻の妊娠期と児の出生後3～4ヶ月にインタビューを行った。その結果、実際に父親役割行動を実践することができた、もしくはできなかった9つの理由が明らかとなり、妻の妊娠中に父親役割行動を現実的かつ具体的にイメージするための具体的な看護援助が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

In the present study, we interviewed 14 first-time fathers during their wives' pregnancy and 3-4 months after the birth of their child in order to elucidate the prediction during pregnancy of paternal roles following the birth of the child as well as the actual condition of paternal roles. Analysis of the responses revealed nine reasons for the ability or inability to actually fulfill paternal roles, and detailed nursing support methods to enable first-time fathers to realistically and concretely envision paternal roles during their wives' pregnancy were suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：父親、親役割、役割行動、妊娠期、役割獲得

1. 研究開始当初の背景

近年、核家族世帯の増加や、就業しながら子育てをする母親の増加、少子化の影響から育児環境が大きく変化し、母親の育児不安、虐待などの問題が顕著となっている。このような状況に、厚生労働省も2005年から「子ども・子育て応援プラン」を策定実施し、も

うひとりの養育者である父親の育児参加を積極的に推奨している。このように、父親の育児参加が促進され、父親自身も以前より親役割を担おうとする意識の高まりがみられる一方、父親はその役割に戸惑ったり、育児に関わっていないことによるストレスを感じている（岩田, 2004）。

父親役割獲得過程に関する研究は、1980年代に Ferketich らによって着手されたが、母親役割獲得の研究に比較して、量、質ともに研究が立ち遅れている。また特に親役割準備期である妊娠期の父親役割獲得については、これまでほとんど言及されず、わが国においても関連する調査はほとんど見当たらない。林（林, 2007）は、第1子出生後に夫婦が父親役割行動を円滑に調整するための看護介入プログラムを明らかにしている。しかし、親役割準備期については夫婦間の役割調整を行う必要があると述べるに留まり、この時期の具体的な看護援助は提示していない。木越ら（木越, 2006）も、妊娠期の父親像形成が産後の父親役割行動を具体化すると考察しているが産後の調査はしていない。また、三井ら（三井, 2005）は産後の調査から理想の父親像をもつことが実際の役割行動の実践につながると明らかにしているが妊娠期の調査は行っていない。以上より、親となる男性が、妊娠期に父親役割行動をどのように想像しているのか、また父親役割行動を想像していたように実践しているのかについては明らかになっておらず、妻の妊娠中に父親役割行動を現実的かつ具体的にイメージするための具体的な看護援助方法については明らかにされていない。

2. 研究の目的

(1) 第1子出生後の父親役割行動に対する妊娠期の予測と、児の出生後における父親役割行動の実際を明らかにし、実施できたあるいは実施できなかった父親役割行動を明確にする。

(2) (1) の実施の有無に関係した要因を分析し、初めて親となる男性が、妻の妊娠中に父親役割行動を現実的かつ具体的にイメージするためにはどのような看護援助が必要か明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

質的・縦断的研究

(2) データ収集期間

平成21年11月～平成22年10月

(3) 用語の操作的定義

父親役割行動：育児、家事、妻への精神的支援、生活習慣の修正

(4) 研究対象者

以下の条件を満たし、途中辞退等を考慮し、研究参加の承諾が得られた親となる男性とした。①初めて親となる男性、②親となる男性と子どもは血のつながりがあること、③妻と子どもは妊娠中・出産後ともに正常な経過をたどっていること、④親となる男性は日常生活に支障をきたすような健康問題を有していないこと、⑤夫婦で一緒に生活をしてい

ること、⑥日本語が堪能で、コミュニケーションが可能であること、⑦面接時、録音の許可が得られること

(5) 研究協力施設

首都圏内にある分娩施設で、妻の妊娠期には両親が参加できる出産前教育を実施し、夫立会い分娩も行っている施設であった。

(6) 研究対象者の募集方法

研究協力施設への研究協力の承諾を得た後に、施設内にポスターを掲示し、対象候補者に研究協力をお願いする可能性があることを知らせた。対象候補者は、妻の妊婦健康診査のため産科及び助産師外来に来院している親となる男性、及び妻のみが来院している場合のその夫とした。出産準備教室における研究協力依頼は、病棟管理者から依頼された外来看護師・助産師に、研究対象基準と合致する出産準備教室参加者から対象候補者の抽出を依頼し、研究者より説明を聞くことの承諾を得てもらった。また、産科及び助産師外来においても、病棟管理者から依頼された担当看護師・助産師に、研究対象基準と合致する受診者から対象候補者の抽出を依頼し、研究者より説明を聞くことの承諾を得てもらった。

(7) 研究対象者への説明と同意

承諾の得られた対象者に対して、研究者が詳細な研究の趣旨、協力して頂く内容、面接時の録音の許可、研究への自由参加意思と途中辞退の権利の保証、プライバシーの保護、その他倫理的配慮についての十分な説明を依頼文を用いて行った。研究内容の説明時、夫婦が一緒の場合は、夫婦に対して研究参加・協力の依頼を行い、研究への参加・協力について夫婦で話し合うことにより検討してもらった。また母親のみが来院されている場合は、母親に対して研究参加協力の依頼を行い、夫に対して依頼文を渡して伝えてもらうよう説明し、夫婦で話し合い検討してもらうよう依頼した。さらに、夫への説明が必要であればいつでも連絡ができるよう、連絡先を依頼文に明記した。これらをもって夫への研究参加協力依頼とした。調査協力依頼後、電話及びメール等で研究参加協力の確認を行い、同意が得られた時点で研究対象者として面接日時を調整した。同意書には夫婦ともに署名を頂き、同意書は複写により研究対象者と研究者の双方で保管した。

(8) 調査内容

妊娠中の調査内容は、①妻の妊娠中に担おうと考えている父親役割行動、②研究対象者の基本的情報であった。第1子出生後の調査内容は、③実際に実践することができた、もしくは実践できなかった父親役割行動、④実際に父親役割行動を実践することができた、もしくはできなかった理由、⑤研究対象者の基本的情報であった。

(9) 調査方法

調査内容①③④に対する調査方法は、作成した面接ガイドを用いてプレテストを行い修正し、妥当性を確保したうえで、半構成的面接法を実施した。半構成的面接を実施する前に、再度研究協力の意思を確認した。面接場所は研究協力施設の保健指導室や病室などの個室で行い、プライバシーが十分保護されるように配慮した。調査内容②⑤に対する調査方法は、面接試行時に自記式質問紙の記入を依頼した。その内容は、年齢や職業、また妻の年齢や職業等の基本的情報、婚姻年数や不妊治療の有無、出産後の生活（里帰りや産後のサポートの有無、夫の仕事の状況等）、出産前教育の参加の有無や乳幼児の世話経験の有無、残業状況、最終学歴等を調査した。

半構成的面接開始前に自記式質問紙調査を行った。そして質問紙から得た情報を参考にしながら半構成的面接を実施し、内容を深めた。面接内容は再度対象者の承諾を得て録音した。録音した面接内容をもとに逐語録を作成し、研究データとした。

(9) 分析方法

妊娠中の調査内容のデータ分析は、妻の妊娠中に行った半構成的面接をもとに作成した逐語録を精読し、各対象者の「妻の妊娠中に担おうと考えている父親役割行動」を抽出した。続いて第1子出生後の調査内容のデータ分析では、まず抽出した「妻の妊娠中に担おうと考えている父親役割行動」をもとに第1子出生後に半構成的面接を実施した。そして、面接から作成した逐語録を精読して、対象者毎の「実際に実践することができた、もしくは実践できなかった父親役割行動」を抽出し、意味内容を損なわないように簡潔に表現した。そして対象者毎に「実際に妻の妊娠中に担おうと考えていた父親役割行動を実践することができた、もしくはできなかった理由」を抽出し、意味内容を損なわないように抽象度をあげて簡潔に表現しコードとした（個別分析）。個別分析より明らかになったコードを、意味内容の同質性・異質、性に基づいて分類・集約し、コードの集合体を形成して存在する共通性を発見し、意味内容を損なわないように抽象度を上げて表現し、サブカテゴリーとした。そして、サブカテゴリーを導いた方法同様に、サブカテゴリーの意味内容の同質性・異質性に基づき分類・集約して抽象度をあげてカテゴリーとした（全体分析）。

(10) 倫理的配慮

研究への自由参加と途中辞退の権利、匿名性の保証などのプライバシーの保護や個人情報保護の保証などを夫婦に十分に説明し、研究協力の同意を書面にて得た。本研究は平成21年5月に千葉大学大学院看護学研究科倫理委員会から承認を得て、さらに平成

21年8月に研究協力施設の倫理委員会より承認を得て研究を開始した。

4. 研究成果

(1) 研究対象者の概要

研究協力施設より29名の研究対象候補者の紹介を受け、研究者が研究参加依頼を直接行い検討してもらった結果、20名の研究協力参加の同意が得られた。同意が得られなかった方の理由は「時間の都合がつかない」等であった。同意が得られた対象者に対して第1回目の面接を行い、その後、了承を得て2回目の面接を行ったのは14名であった。対象者の概要は表1に示すとおりである。

表1 対象者の概要

年齢	21～46歳 (平均 34,4歳)	
最終学歴	大学院卒	3名
	大学卒	8名
	専門学校卒	2名
	高校卒	1名
妻の年齢	21～45歳 (平均 33,6歳)	
面接時期	1回目	平均妊娠 35週
	2回目	平均産後 112日

(2) 第1子出生後の父親役割行動における予測と実際

個別分析の結果より、対象者毎に「実際に実践することができた、もしくはできなかった父親役割行動」を抽出するとともに「実際に妻の妊娠中に担おうと考えていた父親役割行動を実践することができた、もしくはできなかった理由」を抽出し、意味内容を損なわないように抽象度をあげて簡潔に表現し207のコードを抽出した。各コードに存在する共通性を発見し集合体を形成し意味内容を損なわないよう抽象度をあげて表現し35のサブカテゴリーとなった。さらにサブカテゴリーの意味内容の同質性・異質性に基づき分類・集約して抽象度をあげ、9のカテゴリーとなった。以下、分類されたカテゴリー毎に考察もふまえて説明する。【】はカテゴリーを [] はサブカテゴリーを示す。

【適切な情報や体験談を適時に与えられ、自分の役割について考える時間があつたから】は〔適切な時期に必要な情報を得て、自分の役割を考えることができたから〕、〔参考になる育児の体験談を聞くことで自分たちなりの育児を考えることができたから〕、〔説得力のある根拠に基づいた話を聞いて興味深く考えることができたから〕など、8つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーは、親となる男性にとって必要な情報を適切

な時期に教えてもらったり、示されるとともに、その後得た情報を自分なりにどう活用するか考える時間もあったことが有効であったという理由である。つまり、親となる男性が現実的かつ具体的な父親としての自己像を形成するために、必要だと思われる情報を提供するだけでなく、男性がその情報を活用し自己像を形成する時間も作るよう支援することが必要であると考えられる。

【育児技術体験や育児場面にふれて自分が行う育児を具体的に想像したから】は〔沐浴練習を体験し自分が実施することを実感しイメージしたから〕〔育児に関する具体的な詳細な内容が記載された本を読んで具体的に考えることができたから〕〔育児用品を揃えながら自分が使う姿を想像したから〕などの5つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーから親となる男性は産後の父親役割行動を体験的に学ぶことによって、より現実的に自分が行う姿を想像したと考えられる。このことから妻の妊娠期に親となる男性にも育児演習に関わる機会を多くもたせることが、自分が行う父親役割行動を具体的に考えるのに有効であると考えられる。

【周囲から育児をするよう促され自覚したから】は〔育児する妻から依頼され自覚したから〕〔周囲から育児するよう促され自覚したから〕の2つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーでは、今まで育児に関心の低い男性が、周囲特に妻から具体的に何を行うのか示されたり、期待されていることを認識することで自分の役割に気づくことを示している。妊娠によって自分の体に変化がないため、父性は母性に遅れると言われており、男性に対しては周囲から具体的に何を行うべきか示され促されることが必要であると考えられる。

【妊娠・出産・育児をする妻の負担を認識し夫／父親としての協力できることを模索したから】は〔出産後の母親の心身の負担を知り、育児する妻を想像して親となる自分には何ができるか考えたから〕〔妊娠出産する妻の大変さを知って手伝いをしようと思ったから〕〔育児は母親主体であるので妻のために自分は何が出来るか考えたから〕などの5つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーは、主に育児を行うのは妻という前提のもと、夫として父親としてどのようなサポートができるか考えていることを示す。これから妻に何が起こるのかその負担を知ること、過度な負担が避けられるよう自己の役割を考察していたことから、不安を過度に与えないよう母親に起こる現実的な負担を情報提供することが重要である。

【これまでの妻との役割調整をふまえ今後も協力していこうと考えたから】は〔妻と産後の生活や役割分担について相談しながら

自分の役割を考えたから〕〔今まで行ってきた家事は今後も継続してやっていたから〕の2つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーは、これまでも話し合いながら協力し順調な生活を営んできた夫婦だからこそ今後の展望が明確になっていると考えられる内容である。

【わが子への愛情を深まり育児を楽しみに感じたから】は〔わが子への愛情を感じながら、自分がしてあげられることを考えたから〕〔育児が楽しいことであることを聞き楽しみに感じたから〕の2つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーは、自分が行うことになる育児に興味をもち楽しみに思える機会があったことを示す。このことから、それぞれの男性にとって関心のある情報を選択しながら提供することが必要である。

【周りの男性が育児しているのを見て、自分も当然に感じてできると思ったから】は〔親になった男性が育児の話をしているのを聞いて自分もやるのだと思ったから〕〔世間一般に男親が育児している姿を見て自分もそうなるのだと感じたから〕などの6つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーから男性が育児をすることが一般化してきており、周囲の行動や思考に合わせて自分の行動も考える日本人特有の考えがみられると考えられる。身近に存在する育児をする男性の姿から、自分なりの行動を考える契機を与えることが求められているといえる。

【仕事と家庭内での役割調整について考えたから】は〔自分の仕事状況をふまえて何が出来るか考えたから〕〔家族のサポートを受けることで自分なりの役割を見出そうと思ったから〕の2つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーから男性は仕事により稼ぐという役割が主な役割であり、それを中心に他に出来る自らの役割について考察していることがわかった。男性が仕事と家庭内役割で過重な負担を担わないよう専門家として適切な情報提供が求められると考えられる。

【父親役割モデルを探索し興味しながら自分なりの役割を考えたから】は〔自ら自分が理想とする父親像を探したから〕〔自ら育児に関する情報を取捨選択しながら自分の役割について考えたから〕などの3つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーは、理想とする父親像を積極的に模索している男性の行動を示す。父親にとってまだ役割モデルは少なく、適宜必要な情報を提供したり、親役割モデルと接する機会を提供することが求められると考える。

以上より、結果に考察を加えて、妻の妊娠中に父親役割行動を現実的かつ具体的にイメージするための具体的な看護援助が示唆された。今後は、これらの結果について母性看

護学の専門家によるコンサルタントを受け、学会等で発表していく予定である。また、今回の結果をもとに考案した看護援助についてその効果を測定し新しい看護方法を確立していくことが必要であると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 亜希子 (MORITA AKIKO)

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：10402629

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：